

國學院大學学術情報リポジトリ

大学院短期招聘研究員講演会紹介：

ロベルト・ルナゴメス博士(メキシコ・ハラパ人類学博物館研究員・学芸員)：メキシコ考古学の最新事情

：

2015年度大学院短期招聘研究員および講演会の記録

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 谷口, 康浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001437

大学院短期招聘研究員講演会紹介

ロベルト・ルナゴメス博士

(メキシコ・ハラパ人類学博物館研究員・学芸員)

メキシコ考古学の最新事情 —2015年度大学院短期招聘研究員および講演会の記録—

谷口 康浩

1. 短期招聘研究員の紹介

招聘研究員 ロベルト・ルナゴメス博士(メキシコ・ハラパ人類学博物館研究員・学芸員)

招聘期間 2015年4月20日～5月19日

2015(平成27)年度の國學院大學大学院国際学術交流の一環として、メキシコ・ハラパ人類学博物館研究員・学芸員のロベルト・ルナゴメス博士を招聘した。招聘期間は2015年4月20日から2015年5月19日までの30日間である。短期招聘研究員として一ヶ月間の滞在ではあったが、以下に紹介するとおり、國學院大學での3回の講演・講義を通して、学内外の研究者および大学院生との貴重な学術交流の機会をもつことができた。

ベラクルス州・タバスコ州・オアハカ州にまたがるメキシコ地峡地域には、先古典期(紀元前2500年頃)から古典期終末期(紀元後1000年頃)にかけて様々な文化が盛衰を繰り返した。博士はこの地域の考古学に精通する中堅研究者であり、就中、先古典期のオルメカ文明の研究では第一人者として知られる。博士の専門領域は、いまだに謎の多い古典期後期・終末期(紀元後700-1000年)にも次第に範囲を拡大しており、オルメカ後代の社会を研究しているほとんど唯一の考古学者でもある。

博士はまた、メキシコ国立人類学歴史研究所に属する考古学審議会のメンバーとして、メキシコ国内の全ての遺跡発掘調査を管轄、許認可する立場での仕事にも携わっており、メキシコ考古学の最新事情に精通する一人でもある。

最近の主要な著作は次のとおりである。

Asentamiento Prehispánico en San Lorenzo Tenochtitlán. Symonds, Stacey, Ann Cyphers y Roberto Lunagómez. 2006. Serie San Lorenzo, Coordinadora: Ann Cyphers, Volumen 2, Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Antropológicas y Dirección General de Asuntos del Personal Académico, México.

Excavando en Silencio. Los arqueólogos de ayer. Budar, Lourdes, Sara Ladrón de

Guevara y Roberto Lunagómez (coords.) p.141, Universidad Veracruzana, Xalapa, 2009.

Los patrones arquitectónicos prehispánicos del sur de Veracruz: Época Clásica.
Cuerpo Académico “Arqueología del paisaje y cosmovisión”, Universidad Veracruzana,
Programa del Mejoramiento del Profesorado-PROMEP, Xalapa. p.207, 2011

2. 國學院大學文学部講演会での講演要約（2015年5月16日）

演題 『メキシコ考古学の最新事情』

講師 ロベルト・ルナゴメス・レジェス（博士）

通訳 塚本憲一朗（日本学術振興会PD研究員・青山学院大学、明治大学非常勤講師、
PhD）

本文和訳 小手川博一 メキシコ・ベラクルス大学講師

メキシコは先スペイン期以降、今日まで続く歴史的伝統、豊かな大自然、そして文化に富んだ国です。また、疑いの余地無く、多様な生態系を持つが故に世界の初期文明にも匹敵するようなオルメカ、マヤ、テオティワカン、サポテカ、そしてメシーカ（アステカ）といった様々な文化が栄えたのでしょう。

今日、メキシコではソノラ州やチワワ州といった北部砂漠地帯からチアパス州のラカンドン熱帯雨林やメキシコ・ペテン地域に広がる数百の考古遺跡において特別な経験を旅行者に提供している点は重要です。

メキシコ、当時のこの地域を一纏めにしてメソアメリカと呼びますが、そのような多彩な文化領域を研究するために、中央高原、湾岸、メキシコ西部、オアハカ地域そしてマヤ地域と細分されています。同様に、時期区分に関してもメソアメリカあるいは古代メキシコは大きく4つの時代、先古典期あるいは形成期（紀元前2000年から紀元後100年）、古典期（紀元後100年から600年）、続古典期（600年から900年）、そして後古典期あるいは歴史時代（900年からスペイン人による征服期）に区分されています。

先古典期文化で最も代表的な文化は先スペイン期最初の都市、現在のタバスコ州に位置するラ・ベント遺跡を建設してみせたオルメカ文化でした。この都市では最初の都市計画、そしてオルメカ文化を特徴付ける巨石人頭像、祭壇あるいは玉座と呼ばれる石彫、また立体的に彫刻された人物や想像上の生きものといった記念碑的石彫の製作増加が見られます。その近くにはベラクルス州に属するエステロ・ラボン遺跡があります。この遺跡は、オルメカ文化の最初の首都サン・ロレンソ遺跡の従属都市で、今日までに見つかっているオルメカ文化の玉座の中でも唯一の形態を示す玉座が見つかっており、近年、日本人考古

学者、古手川博一氏によって後代の古典期の埋葬なども発掘されています。

先古典期、あるいは形成期と呼ばれる時期の文化として、メキシコとグアテマラの太平洋沿岸地域のソコヌスコに出現した文化があります。そこにはイグレスシア・ビエハ遺跡があり日本人考古学者の金子明氏が長年調査を続けています。さらにオアハカ地域では、サン・ホセ・モゴート遺跡のようなオアハカ中央盆地に栄えた文化、そして、おそらくメソアメリカ最初の都市の一つと考えられるモンテ・アルバン遺跡、また最近、メキシコ国立人類学研究所によって遺跡公園として一般公開されたアツォンパ遺跡などがあります。メキシコ・ペテン地域ではカラクムル遺跡のような先古典期マヤ文化の遺跡もあります。

メソアメリカ古典期にはテオティワカン遺跡に代表されるような都市国家や計画都市がメキシコ中央高原に出現しました。この都市は、その複雑性、規模、そして収容していた人口など、世界でも最も古い都市の一つです。そこでは日本人考古学者杉山三郎氏が何十年も調査を続けており、近年、月のピラミッド内部における発掘調査によってこの先スペイン期都市の初期における人身犠牲の証拠や多数の奉納品が発見されました。一方、古典期の遺跡はメソアメリカのその他の地域、例えばマヤ地域などでも発展しました。ユカタン半島のチチェン・イツァ遺跡やウシュマル遺跡などはその広大な遺跡、発達した建築、膨大な住民をコントロールして実施された農業のための天文学の利用、様々な大都市や小都市を繋いでいた「サクベ」あるいは古道などに証拠づけられる交易などが見られます。

古典期終末期のその他のマヤ遺跡としては、チアパス州のパレンケ遺跡やトニナー遺跡、そしてタバスコ州のコマルカルコ遺跡などが代表としてあげられます。例えば、メキシコ湾沿岸部に近く壮大な建築様式を発展させたコマルカルコでは、板状の粘土やレンガを用いて大きな建造物が造られました。一方、パレンケ遺跡ではピラミッド内部の石室に意図的に「パカル王」や「赤の女王」支配者層の埋葬をすることもありました。ホンジュラスのコパン遺跡でも、犠牲としてピラミッドやその他の建造物の内部に埋葬されたと考えられていた例も王墓であった事が分かっています。

その近くのペテン地域のジャングルでもマヤ人達の大規模都市や都市国家が出現しました。カンペチェ州に位置するカラクム遺跡はメキシコとグアテマラにまたがるペテン野生生物保護地域の中にあります。また、近年、日本人考古学者塚本憲一郎氏によって調査されているエル・パルマール遺跡では、カラクム遺跡やその他の遺跡の従属都市と考えられ、規模は小さいにも関わらず、建築、「サクベ（古道）」、そして遺跡の歴史や他のマヤ遺跡ホンジュラスのコパン遺跡との関係に関する碑文が刻まれた階段などに証拠づけられる複雑な社会政治組織の存在が明らかにされています。

中央メキシコのテオティワカンの覇権喪失後、社会政治的な多様化が起こった続古典期

に関しては、ショチカルコ、トゥーラ、 Cholula としてメキシコ湾岸部のタヒンが地域的な首都として登場し繁栄しました。タヒンは先スペイン期の最も繁栄した都市の一つで、壁龕、柱や壁の上部に取り付けられた装飾、「シカルコユキ」と呼ばれる階段状の連続模様などの建築様式が特徴的です。また、近隣のプエブラ盆地に位置するカントナ遺跡と同様に、タヒン遺跡には多数の球技場がありました。これらの球技場では、時期にもよりますが、ライバル関係あるいは同盟関係にある都市間で軍事的あるいは商業的な行動を規則的に解決するために神聖な儀式として球技が行なわれました。

メソアメリカの先スペイン期の歴史の最後の部分は、マヤ、ミシュテカ・プエブラそしてメシカに見られるような様々な記述体系の出現により、後古典期あるいは歴史時代と呼ばれます。この時期は、中央メキシコやマヤ地域における社会政治的な重大な変化、移民、そして軍事的な行動などがあった時代だと考えられています。メキシコを旅行される際には是非訪れて欲しい遺跡の一つとして、メキシコシティ中心部に位置するメシカ人あるいはアステカ人と呼ばれる人々のテンプロ・マジョール遺跡があります。この遺跡は首都テノチティトランの繁栄の一部を今に伝えており、メシカ人の雨の神トラロックと戦争の神ウィツィロポチトリに捧げられた双子の神殿がそびえる壮大な建築を見る事が出来ます。また、この遺跡の近く、メキシコシティ南部には、先古典期のクイクイルコ遺跡もあります。この遺跡は、シトレ火山の溶岩に覆われた唯一の遺跡で、円形のピラミッドという奇妙な建造物が見られます。さらに、メキシコ湾沿岸部でも1519年にスペイン人達によって目撃された後古典期の重要な都市がいくつも存在し、センボアラは海岸近くにありエルナン・コルテスが最初に訪れた先スペイン期の都市です。

メキシコ国立人類学歴史研究所 (INAH) は、メキシコにおける国内資本あるいは国外資本による全ての考古学調査の許可を出し、遺跡の保護や調査を一手に引き受ける政府の機関です。メキシコにおける国外資本の考古学調査の中で最も多いのは隣国であるアメリカ合衆国による調査で、その他にもスペインやフランスによる調査もあります。しかし、数十年前から今日に至るまで、日本人考古学者によってテオティワカン、トルーカ盆地、イグレスΙΑ・ビエハ、トラランカレカ、ラ・ホジャ、エル・パルマール、エステロ・ラボンそしてその他の遺跡で調査が進められています。

実際に、メキシコ全土が一つの考古遺跡と言う事もでき、その全ての保護、保存そして調査を実施するにはあまりにも領域が広すぎて難しいというのが実情です。しかしながら、近年の調査技術の進歩などによって現在ではおよそ200遺跡が遺跡公園として一般公開されています。ところが、総数が10万遺跡以上あると言われている一般公開されていない遺跡は、アメリカ合衆国と国境を接するバハ・カリフォルニア州からカリブ海に面しベリー

ズと国境を接するキンタナ・ロー州までまたがっており、遺跡の内容も炉跡、貝塚、槍先などの打製石器、洞窟壁画や洞窟の壁面に施された彫刻などに証拠づけられる狩猟採集民のキャンプ地から、テオティワカン、チチェン・イツァ、カラクムル、カントナ、モンテ・アルバンやその他の数十kmに及ぶ大規模都市遺跡まで様々です。

メキシコには数百の考古学博物館が存在し、それらは主にINAHによって運営されていますが、その他の研究所などによって運営されているものなどもあり、そこでは先スペイン期の芸術が展示されています。メキシコで最も重要な博物館は国立人類学博物館で、世界でも有数の博物館の一つだと考えられています。そこは中央高原、オアハカ、マヤ、メキシコ湾岸、メキシコ北部などメソアメリカの地域毎に様々な展示室に分かれています。

メキシコで二番目に重要な博物館はハラパ人類学博物館（Museo de Antropología de Xalapa-MAX）です。ここに オルメカ文化芸術に関して世界でもより完璧に近いコレクションとして、7体の巨石人頭像、数体の玉座、数十体の人物、動物あるいは想像上の人物の立体彫像、数百のヒスイやその他の緑色の石で作られた仮面、石斧そして儀礼に用いる神具などを収蔵・展示しています。

このようにして、他のアメリカそして世界の初期文明に匹敵する文明が発祥し、衰退し、アメリカ大陸原住民とヨーロッパ、アフリカ大陸の人々の共生の産物として変化を遂げた土地が今日のメキシコです。そしてこの日本という美しい自然と長い伝統文化に満ちあふれた特別な国の皆さんを、時間的にも様式的にも何らかの方法で共有する事の出来る私の母国メキシコの先スペイン期の歴史を少しでも知ってもらえるように招待したいと思っています。

注）以上は、ロベルト・ルナゴメス博士が準備されたスペイン語原稿を小手川博一氏が和訳したものです。

当日の聴講記録から

メキシコ国内には、少なくとも10万以上の遺跡が所在し、そのうち187遺跡がメキシコ国立人類学歴史研究所（INAH）により保存・管理されており、特に16遺跡は現在ユネスコによる世界遺産に登録されている。世界遺産に登録されている主な遺跡を時期ごとにあげると、先古典期では、オルメカ文明の遺跡であるラ・ベンタ遺跡が登録されているのみである。古典期では、巨大な都市国家であり最盛期には50万人が居住していたとされるテオティワカン遺跡、メキシコ中央高原に位置し漆喰の仮面が出土したカラクムル遺跡などがある。後古典期では、ユカタン半島に位置し球技場で有名なチチェン・イツァ遺跡などがある。

以上のようにメキシコには多くの歴史的価値のある遺跡が保存されているが、それにも

関わらずそのほとんどが都市化による遺跡破壊や土地の領有問題、先住民との問題など個々に問題を抱えている。例えば、前述したテオティワカン遺跡では、周辺の都市開発のため遺跡が破壊されつつあり、チチェン・イツァ遺跡では世界遺産に登録されたにも関わらず、遺跡の半数が未だに私有地であるという問題を抱えている。そのため、メキシコ政府やユネスコ機関のみではなく、INAH以外の多くの地方の博物館、研究機関、大学等によって遺跡を保存・管理・運営していかなければならない。

(記録：馬場羽瑠桂、本学大学院博士課程前期2年)

3. 大学院での講義要旨

講義1「アメリカ大陸の旧石器時代から農耕の起源まで」

アメリカ大陸における人類史は、アフリカ大陸から人類が移住してきた新人段階に始まる。考古資料としての、最古の人類の痕跡はクロヴィスと呼ばれる石器である。クロヴィス石器は投槍器により大型の動物の狩猟に用いられたと考えられており、同時期の魚の尻尾に似た形の石器と共に、地域差をもちながらもアメリカ大陸に広く確認されることから、当該期の人々は移動的な生活を送っていたと考えられた。

特定の場所で生活が行われるようになるのは大型の動物が絶滅してからの事であり、小動物の狩猟および植物質食料が生業の中心となり生活領域が狭まる。植物質食料というと、現在のアメリカ大陸ではトウモロコシが中心であるが、考古資料から定住の始まったころの食生活を捉えると、石棒や石皿の植物加工具が出土していることから根茎類が想像以上に重要であったことがわかっている。栽培による生業活動は、最古のもので6000年前にその痕跡が確認され、トウモロコシの栽培農耕は4000年前に低湿地帯において始まった。

定住開始の要因として挙げられる農耕であるが、メキシコで定住が開始した当初は漁労や根茎類の採集に頼るところが大きく、農耕は定住生活が始まった後に始まることが分かってきた。また、定住的で階層化された遺跡においても土器が出土しない例があり、定住生活と関係の深いと考えられてきた土器や農耕が、メキシコでは単純には捉えられず、人類史の理解においても重要な資料であるといえる。

(記録：佐藤拓也、本学大学院博士課程前期2年)

講義2「オルメカ文明」

オルメカ地域は35,000km²に及び、その大部分が湿地帯で、また多数の火山がみられる。オルメカ文明はこれらの環境に適応し紀元前1500年から紀元後150年まで興隆したと考えられ、これはメソアメリカの中で最も長期間継続した文明である。オルメカ文明ではセン

ターと呼ばれる中心地が大きくサン・ロレンソ遺跡、ラ・ベント遺跡、トレス・サボテス遺跡と移り変わっており、主にこれらの遺跡の調査から、セトルメントパターンの解明や都市内での階層差、人種に関する研究などが行われてきた。また、翡翠製品やマスクが出土したラマルセ遺跡やラスリマス遺跡、アルジョペスケロ遺跡、カヌーや土器を装飾するための塗料がとられていたチャボポテの鉱山など他にも様々な遺跡が発見されており、オルメカ文明の多様性が推察されている。しかし、オルメカ考古学はその初期に巨石人頭像自体に関する興味関心が先行したため、考古学的調査の歴史は比較的浅く、踏査も10,000km²と全体の約3分の1しか行われていないため研究が断片的である。オルメカ文明全体の解明を行うためには今後も科学的な調査と踏査を継続していくことが必要である。

(記録：中川幹啓、本学大学院博士課程前期2年)